

# 平山天満宮

—福岡県宗像市吉留所在平山天満宮本殿の調査報告—

宗像市文化財調査報告書 第73集

2015

宗像市教育委員会

## はじめに

宗像市は福岡市と北九州市の中間に位置する、ベッタウンのまちであり、玄界灘やさつき松原、四塚連山といった豊かな自然にも恵まれ、宗像大社や鎮国寺をはじめとする歴史薫るまちでもあります。

平成 24 年 4 月に開館した歴史拠点施設「海の道むなかた館」は、歴史を学び感じる施設として企画・特別展示やイベントを実施してまいりました。おかげさまで、開館からまもなく 3 周年を迎えようとしていますが、現在も数多くの市民の皆様にご来館いただいているところです。

また、平成 22 年 2 月に国史跡に指定された田熊石畑遺跡は現在、歴史公園整備が進んでいます。平成 26 年 8 月には田熊石畑遺跡墓域出土品が国重要文化財に指定されました。現在、平成 27 年 7 月の歴史公園全面オープンに向け、市民協働で作業を進めているところです。

さて、本書は平成 25 年に市指定有形文化財（建造物）に指定された平山天満宮本殿の調査報告書です。調査に際しては、宗像市文化財保護審議会委員の山野善郎氏に多大な協力をいただきました。その結果、天保 14 年建築と想定される本殿は、小屋根の構造が独創性に富み、18 世紀以前の板葺神社本殿の様相をよく保っていることが分かりました。これらの調査結果は指定に際しての貴重な資料として活用させていただきました。

本書が学術研究はもとより教育や学習の場で活用され、文化財保護行政に対するご理解の一助となることを願うとともに、平山天満宮の調査から指定までご理解ご協力いただいた多くの方々に心から感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月

宗像市教育委員会

教育長 遠矢 修

## 例 言

1. 本書は平成24年度に調査を実施した福岡県宗像市吉留（字平山）960番地に所在する平山天満宮本殿の調査報告書である。
2. 平山天満宮本殿の宗像市指定文化財名称は「平山天満宮本殿」である。
3. 平山天満宮の宗像市指定文化財区分は有形文化財（建造物）指定番号は第28号である。
4. 調査に際しては文化財保護審議会委員の山野善郎氏（以下敬称略）をはじめ多くの方々に多大なご協力をいただいた。記して謝意を表す。
5. 調査は宗像市教育委員会が主体となり、山野・松尾美幸（建築史塾 Archist）・古賀涼平（当時九州産業大学大学院生）が行った。
6. 図面作成は山野・松尾・古賀が行った。
7. 写真撮影は図版1を牛嶋茂が、その他については山野が行った。
8. 調査記録は原図については山野が保管し、その他については宗像市教育委員会（郷土文化交流課）が保管している。
9. 本報告書は山野による調査報告を原典とし、編集を山田広幸が行った。

## 目 次

### 第Ⅰ章 序章

1. 調査に至る経緯から指定まで……………1
2. 宗像市文化財組織および文化財保護審議会……………1

### 第Ⅱ章 位置と環境

1. 位置的環境……………3
2. 歴史的環境……………3

### 第Ⅲ章 調査の成果

1. 社地内の金石文……………4
2. 拝殿再興棟札……………4
3. 本殿の構造と意匠……………7
4. 本殿の建築年代……………8
5. 有形文化財建造物としての価値……………8

図版1～3

## 第Ⅰ章 序章

### 1. 調査に至る経緯から指定まで

#### (1) 調査に至る経緯

平成23年4月11日に地元平山区から市教育委員会へ平山天満宮本殿の建替え等に関する相談があった。平山天満宮本殿は『宗像市史』にも記載のある建造物であるため、市として状況を把握する必要があると判断し、事前調査を行いたい旨を申し出たところ、地元から承諾を得たため、翌4月11日に事前調査を行った。調査では、本殿扉内側に天保十四年銘が認められ、本殿内部からは神像三体を確認、うち一体の底部に墨書が記されていた。

平成23年4月25日に開催した平成23年度第1回宗像市文化財保護審議会において上記の報告を行い、委員から市指定有形文化財への可能性について指摘があったため、5月27日付け文書にて文化財保護審議会委員である山野氏へ調査協力を依頼(23宗郷第134号)し、建造物調査をするに至った。

#### (2) 調査

平成23年6月9日には山野氏、地元関係者をはじめ市文化財担当者立会いのもと、現地にて調査方針等について協議をした。その後、10月4日、5日、8日、12日、13日、26日に図面を作成し、翌年2月11日に補足調査を行った。

#### (3) 審議

平成23年10月18日に開催した平成23年度第2回宗像市文化財保護審議会では、調査結果の報告並びに指定案件として審議を行い、指定に相応しい建造物であるとの回答を得た。

#### (4) 申請書提出

平成24年8月6日には、宗像市文化財保

護条例第4条第3項の規定に基づき、所有者より宗像市指定文化財についての申請書が提出された。

#### (5) 諮問・答申

その後、宗像市文化財保護条例第4条第3項の規定に基づき、平成24年9月20日付け文書(24宗郷第252号)にて教育委員会から文化財保護審議会へ文化財指定についての諮問がなされた。平成25年3月14日には平成24年度第2回宗像市文化財保護審議会を開催し、諮問に基づいて審議がなされ、平成25年5月10日に指定相応の答申がなされた。

#### (6) 告示・指定

文化財保護審議会の答申を得た後、告示を行い、平成25年5月22日付け文書(25宗郷第194号)にて宗像市指定有形文化財(建造物)に指定された。なお、指定名称は「平山天満宮本殿」、指定番号は第28号である。

### 2. 調査組織および

#### 文化財保護審議会

平成23(2011)年度

宗像市教育委員会

教育長	城月	カヨ子	
(平成23年5月23日～)	久芳	昭文	
市民協働・環境部長	福崎	常喜	
市民活動推進課長	磯部	輝美	
郷土文化学習交流室長	清水	比呂之	
文化財係長	安部	裕久	
担当	主査	白木	英敏
	技師	山田	広幸

平成24(2012)年度

宗像市教育委員会

教育長	久芳	昭文
-----	----	----

市民協働・環境部長	福崎 常喜
郷土文化学習交流課長	清水 比呂之
文化財係長	安部 裕久
担当 主査	白木 英敏
技師	山田 広幸

平成 23 (2011) 年度

(委嘱期間：平成 22 年 12 月 1 日～

平成 24 年 11 月 30 日)

宗像市文化財保護審議委員会

委員

西谷 正	(九州歴史資料館館長)
桑田 和明	(宗像市立城山中学校教諭)
山野 善郎	(元九州大学大学院助教授)
森 弘子	(大宰府発見塾塾長)
川窪 奈津子	(宗像大社神宝館文化財管理 事務局学芸員)
宮元 香織	(北九州市立自然・歴史博物 館学芸員)

※所属は委嘱状交付時

平成 24 (2012) 年度～

(委嘱期間：平成 24 年 12 月 1 日～

平成 26 年 11 月 30 日)

宗像市文化財保護審議委員会

委員

西谷 正	(九州歴史資料館・海の道む なかた館館長)
桑田 和明	(元宗像市立城山中学校教諭)
山野 善郎	(建築史塾 Archist 代表)
森 弘子	(大宰府発見塾塾長)
川窪 奈津子	(宗像大社神宝館文化財管理 事務局学芸員)
井上 晋	(福岡県文化財保護審議会委員)
石山 勲	(日本考古学協会会員)

※所属は委嘱状交付時



pho.1 集落からみた平山天満宮（北から）



pho.2 拝殿正面（東から）



pho.3 手水舎からみた石段（東から）

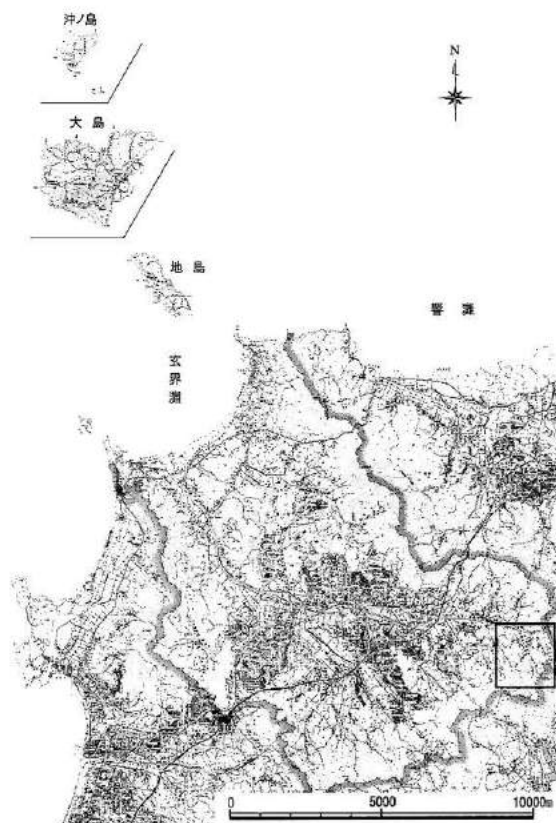
## 第Ⅱ章 位置と環境

### 1. 位置的環境

平山天満宮本殿は、宗像市から宮若市に通じる県道 87 号線西側の丘陵北部、平山集落の南に広がる、杉・檜と雑木が交じった林の中に鎮座する。集落を南西に貫く坂道の途中で南に枝分かれする畦道を行き、石段を上り石造の鳥居二基を潜ると、福岡県天然記念物指定の「平山天満宮の大クス」が右手にそびえる平坦地に出る。大楠の側を時計回りに巡り、石敷きの道に導かれて、手水舎の脇から急な石段を上り詰めると切妻造妻入の拝殿が見える。拝殿の背後に五段の石垣を積み、吹放ち覆屋を架して本殿を風雨から護る。本殿は北東、つまり集落へ登る谷間を向く。

### 2. 歴史的環境

平山天満宮については寛政 10 年 (1798) の序文をもつ『筑前国続風土記附録』の吉留村の項に「天満宮くヒラヤマ」とあるのが、現在のところ最も古い記録である。次に、文政 6 年 (1823) までに宗像郡の草稿が完成したとされる『筑前国続風土記拾遺』に、やや詳しい記事がある。当時は平山の山上にあると述べた後、永延 2 年 (988) 宗像氏能の創建、天正年間に社地を麓に移したが元禄 13 年 (1700) に再び山上に遷座したと伝える「旧記」があることを紹介する。ただ、永延 2 年の干支は戊子であるのに「旧記」は戊寅としている。昭和 7 年 (1932) 初版の『宗像郡誌』下巻「菅原神社 (吉留村大字吉留字水上)」の項はこれを批判せず本文「由緒」で訂正するに止めたが、創建時期は未詳とするのが妥当であろう。なお『宗像郡誌』は、社地の移転を元禄 13 年 11 月 26 日と詳述しており、何らかの史料を参照したと考えられる。



第1図 平山天満宮位置図 (広域)



第2図 平山天満宮位置図 (1/25,000)



### 第Ⅲ章 調査の成果

#### 1. 社地内の金石文

社地に現存する金石文では、手水舎の右上に立つ石造鳥居に陰刻された安永7年(1778)の銘が最古である。この鳥居は北の柱に明治31年(1898)再修と刻まれる。次に古いのは大楠東の常夜燈の嘉永7年(1854)、拝殿前の狛犬台座の万延元年(1860)、本殿前面石垣築造に伴う石柵・石階寄進を記す明治20年(1887)、大楠南の石造鳥居の明治22年(1889)である。この後、前掲石造鳥居再修の明治31年(1898)、菅公一千年祭記念碑の明治39年(1906)、石造手水鉢の明治42年(1909)、石段修築碑の昭和3年(1928)と続き、集落からの畦道が尽きて最初の石段上にある石造鳥居の昭和26年(1951)が最も新しい。

#### 2. 拝殿再興棟札

拝殿の墨書木札では、天井中央に打ち付けられている明治20年(1887)の拝殿再興棟札が『宗像市史』通史編第四巻に記されてよく知られている。しかし制作年不祥ながら、拝殿北側の壁面に掲げられた「鞍手郡長谷村後拝柱石壺對」以下の寄進木札の内容は注目に値する。寄進者の住所が、鞍手郡の長谷村、倉久村、新延村、八尋村、古門村、遠賀郡粕塚村、宗像郡の野坂村、富地原村、武丸村、名残村、赤間村と記され、藩政時代の行政区分に対応するからである。同じ吉留地区・宮ノ尾に鎮座する八所神社は、宝永6年(1709)の自序がある『筑前国続風土記』「吉富村八所大明神」の項に、赤間の辺すべて十村の土地神で、むかしは御旅所に神幸が行われていた旨が記され広い信仰圏を有していた。それに比べて、平山天満宮は吉留だけで崇敬された小社のように扱われることが多い。しかし、

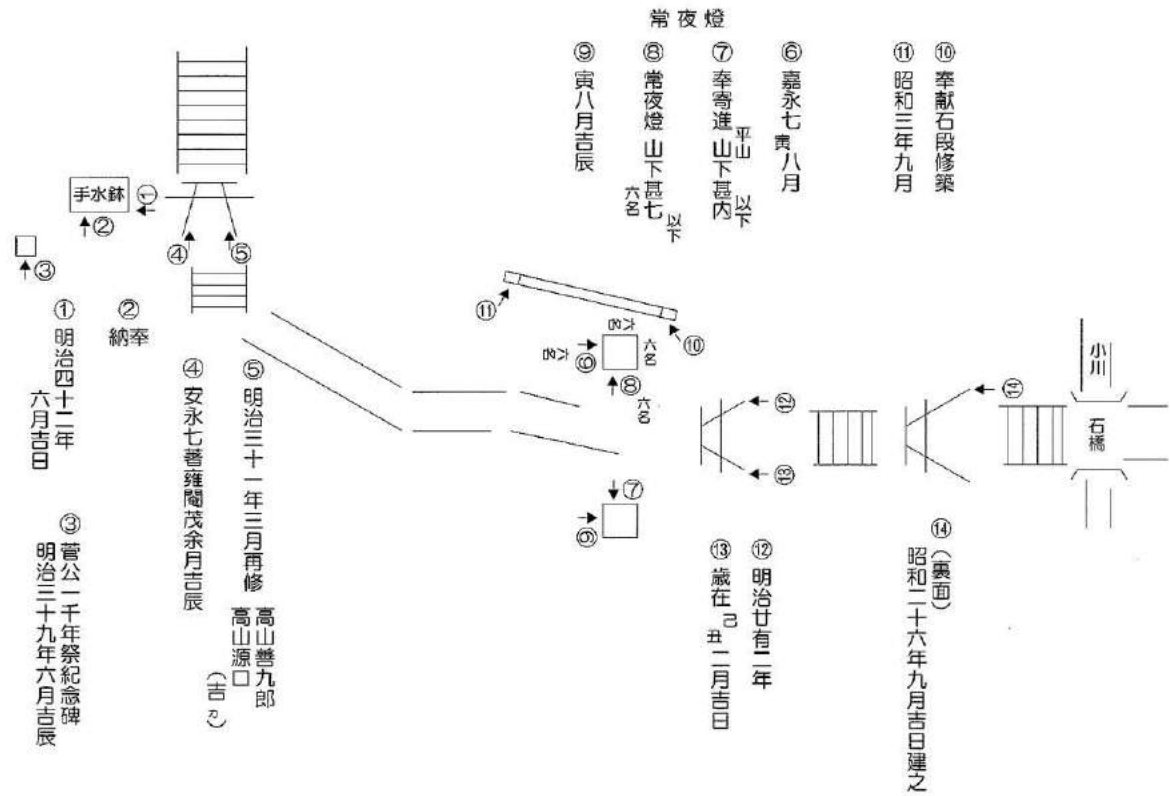
この寄進木札を見る限り、広く支援された時期のあったことが窺える。

なお木札に記された一件当たりの寄進高は、十五銭が4件、木綿一反が6件と大半を占める。両者がほぼ等価とみなされたと推測して大過ないと考えられる。ところで近代の木綿価格について書かれた久米高史「幕末維新期の「外圧」と和泉木綿」『日本研究』(国際日本文化研究センター紀要、平成14年(2002), p. 234, 表9)を参照すると、幕末維新期の木綿一反の価格は、国産か輸入かを問わず、最下級の品で20銭以上だった。和泉木綿との品質差、地域価格差を考慮しても、明治の早い時期に遡る寄進木札の可能性を考慮すべきではないだろうか。本殿や現在は失われた建物の可能性も十分にあるが、もし「後拝柱石壺對」が拝殿の向拝柱に用いられている角形礎盤を指すならば、この墨書寄進木札は明治20年(1887)の拝殿再興に関連するとも考えられる。

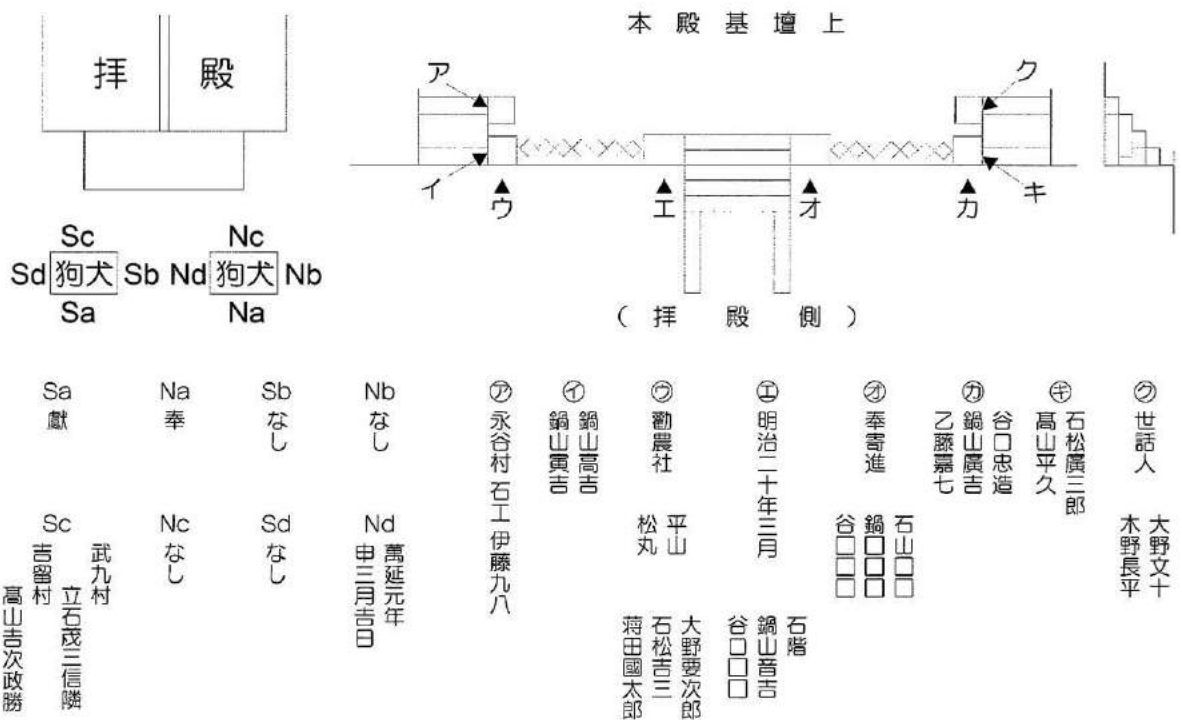


pho.4

平成13年神殿内部改修置札



第3図 銘文 大楠・手水舎周り

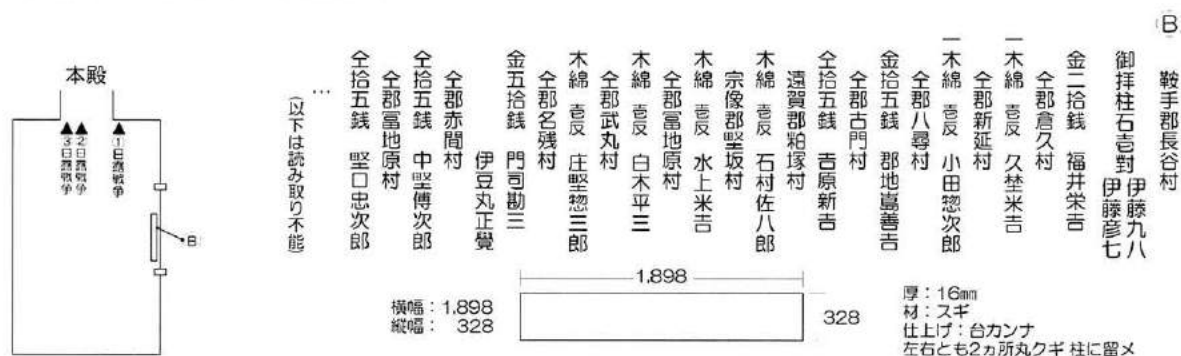


第4図 銘文 本殿・拝殿周り





pho.5 寄進墨書木札 拝殿北壁



第5図 明治20年拝殿再興棟札位置図

第6図 寄進墨書木札読下し 拝殿北壁



pho.6 明治20年  
拝殿再興棟札

日月清明陰陽和合 明治二十年丁亥  
(興)  
奉再口 拝殿壹棟 當村氏子中  
天下泰平五穀豐穰 歲在三月上院

祠掌 大工棟梁 建築世話人  
宮本貞潔 伊賀嘉平 高山徳七  
大和利右エ門 高山雄三郎  
木挽棟梁 高山吉作  
戸長 谷口徳七 石松周蔵  
伊豆孫次郎 同苗與七 平山谷中

丸クギ上下各二本

第7図 明治20年  
拝殿再興棟札読下し



pho.7 虹梁背面墨書



pho.8 虹梁背面墨書①



pho.9 (上) 虹梁背面墨書②

pho.10 (左) 定規縁裏面書 板唐戸

### 3. 本殿の構造と意匠

本殿は、一間社流造板葺、桁行5尺、梁間4尺の身舎に4尺弱の向拝を付す。土居上端から棟木下端まで1丈1尺7寸、身舎背面の軒高は7尺1寸、軒の出はほぼ2尺8寸5分を測る。ただし茅負は一部破損して乱れが大きい。

背面から前面に緩やかに傾斜した石積みの上の地面に煉瓦を積んで水平に均し、覆屋の土居を四方に巡らせる。その内側に亀腹を築き、木製の地覆を組む。地覆の四隅に直径5寸8分の丸柱を立て、腰長押、内法長押、頭貫で身舎の軸部を固める。梁間は、妻面に見せる虹梁とは別に、南北一對の丑梁で前後の桁を繋ぎ、背面ではその丑梁上に荒削りの野桁を渡して三箇所の方杖を載せ野垂木を支える。正面側の小屋は、二本の向拝柱を繋ぐ化粧桁の真上に角材を転ばせ、これに束を立てて母屋桁を支え、棟木から一気に野垂木を架け降ろす。その棟木は、化粧棟木に立てた南北二本の束だけで支え、化粧棟木は両妻の虹梁中央で大瓶束に造り出した束で支える。上記以外には、束も貫も一切用いず、一般的な意味で小屋組と呼べる構造的配慮は認められない。神座に据える宮殿や神棚に飾る神殿は別として、この規模の神社本殿では、きわめて簡素で珍しい小屋裏といえる。

身舎は柱高に揃えて竿縁天井を張り、背面から三分の一ほどを神座として前面の板床より1尺2寸高く構える。框と内法長押で小脇壁を挟み、中央に板唐戸を立てて神座への視線を遮る。身舎の三方に跳高欄付きの切目縁を回し、背面柱筋に脇障子を構える。現況では高欄の鉾木は両側面とも欠損している。正面は、板唐戸を開き、向拝に向かって登高欄付の木階五級を設ける。切目長押の上下で切れず、横嵌め板を柱の縦溝に落とし込んで壁

とする。向拝は切面取りの角柱で、地面に埋め込まれた礎石から直接立ち上がる。身舎と向拝は海老虹梁で繋ぐ。軒裏は二軒繁垂木、正面は地垂木を向拝に打越す。ただし垂木は向拝への打越垂木を除いて構造的な役割は担っておらず、野地板に付加された飾り垂木である。

全体に装飾的要素は控えめで、身舎柱上には実肘木付きの出組を載せ、丸桁・虹梁との間は蛇腹支輪で塞ぐ。両妻の虹梁上に立つ大瓶束に獣面の結綿を飾る。身舎北側面には波の上を渡る鹿、向拝の中備には梅に鶯を彫った墓股を用いるが、作風はどちらも素朴である。破風の坪みには猪目懸魚を吊り、降りにも桁隠しの痕跡がある。彩色は主に木口に残っており、『宗像市史』通史編第四巻の解説にいう極彩色の痕跡は確認できなかった。虹梁、海老虹梁、木鼻、実肘木の絵様は、彫り幅が細く浅い上にごく簡略であり、虹梁の引き眉が浅いので『宗像市史』では近傍の八所神社本殿に類似すると述べ18世紀初期と推定された。しかし渦も若葉も丁寧な細工を施すが、当該時期の力強さは認められない。

むしろこの本殿では、屋根の葺き材とその仕様が注目に値する。正面と背面の中央に、水平の長さ6尺1寸ほど、勾配方向の幅7寸から1尺2寸、厚みが4分から6分の板瓦を葺き上げる。簀甲は、部位ごとに矯めて異なる曲（くせ）をつけた長さ2尺～3尺弱の板瓦で、滑らかな曲面を形作る。中央の長尺板瓦と、簀甲の曲面板瓦の間は、長さ1尺弱の板瓦を伏せて曲率の違いを調整する。現況では丸釘を打って止めるが、重ね代が短い上に欠損した部分が多く、雨を防ぐ目的を果たしていない。大棟は、正面と背面の板瓦を突き合わせただけである。覆屋の棟木との隙間が僅かなため頂部の覆板を省略したものか、きわめて不審である。この板葺だけでは、雨を

防ぐという屋根の基本的な性能を満たすことができず、当初から覆屋と一体で計画されたものと推定できる。

ちなみに、このような厚みのある板葺が残っていることは、文化財的な価値が高く貴重である。寛政5年(1793)の成立が推測されている「宗像郡明細帳」(『宗像市史』史料編第三巻近世, 文書史料 156:「福岡県史資料編編纂資料 195」福岡県立図書館蔵から抜粋再録)を参照すると、的原大明神神殿(村山田村岩野)、同村の天満宮二棟、六之御前社神殿(久原村いはノ元)、同村の川崎大明神神殿、貴布禰社、福地神社、熊野宮神殿(王丸村金魚山)に「板葺」と記される。たとえば和歌大明神神殿(大井村)の「小板葺」とは明確に書き分けられる。「小板葺」は、こけら(柿)板という短冊状の薄板を用いた屋根葺き仕様と考えられる。『宗像市史』通史編第四巻で厚板葺と報告された他社本殿の現状は別紙の通りで、この規模の本殿で板葺が現存することは希少で地域的特徴といえる。

#### 4. 本殿の建築年代

解体を伴わない調査であったが、本殿の二箇所で大保14年(1843)の墨書が認められ、神殿内部改修を記す平成13年(2001)の置札が確認できた。

まず身舎正面の板唐戸の定規縁裏面に、「天保十四年卯六月吉日 大工棟梁伊賀正六光政作之 小工平口」とある。行の左半分が扉板に隠れており、解体すればさらに文字が現れる可能性がある。また、身舎南側虹梁の小屋裏面に「天保十四年 / 卯四月作之 / 吉留大工伊賀 / 正六 / 平等大工吉田 / 弥八」の墨書が残る。このうち、吉田姓の大工については「文政八年(一八二五)十一月、土穴・生目八幡棟札」(『宗像市史』史料編第三巻近世, 建築造営史料 57)にみえる「平等寺大工

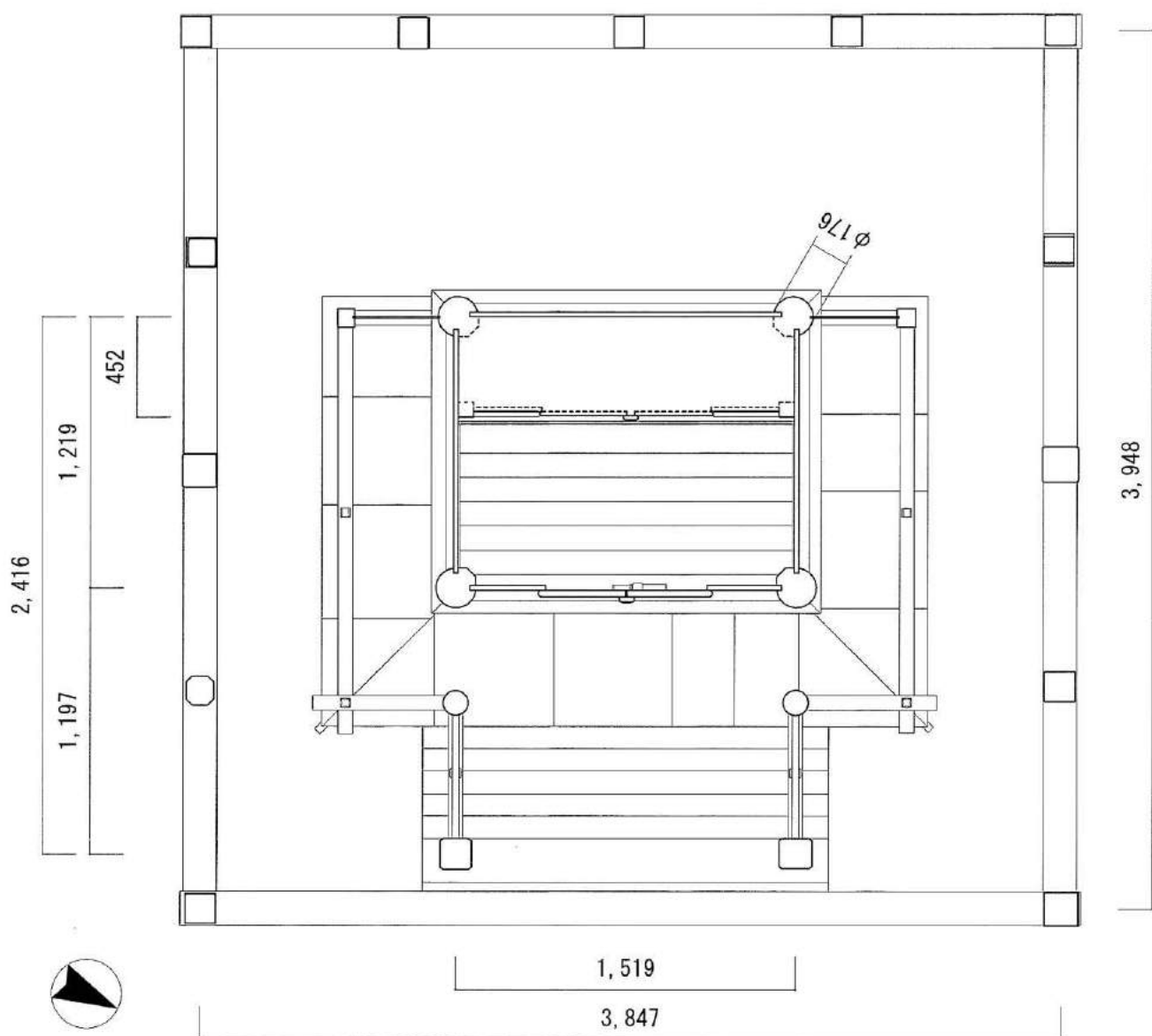
吉田弥平光久」との関係が注目される。

天保14年(1843)の宗像では、郡奉行の平野与次右衛門以下5名が何らかの責を負って退役ないし隠居を命じられ(「家事記録」(古野家文書)『宗像市史』史料編第三巻近世, 地方文書 154)、政情が安定していたとは言えない。天保13年(1842)閏寅12月には俵約令が改めて公布され(『福岡県史』第二冊上巻 190～200頁)、家作の木材、建具をはじめ、書院の床・長押・彫物・欄間・束の仕様から庭造りに至るまで華美を厳しく禁じている。現実が華美だったからこそその禁令であるが、「堂塔之普請」を名指しして寄進の出費を省略するよう指示していることを勘案すると、平山天満宮本殿の天保14年修造にあたり、装飾が時代の流行を追わず、簡略・素朴に抑制された背景が理解できる。

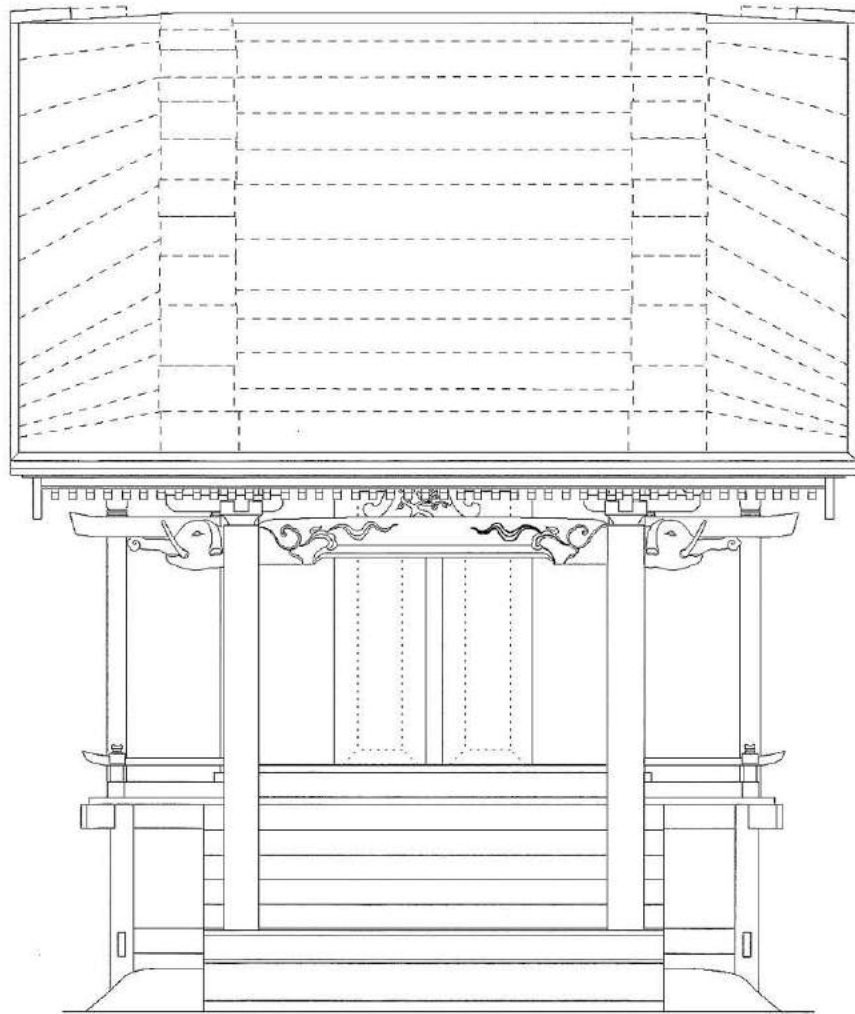
完全な新築だったか、大規模な修理だったかは、今回の調査からは推断できないが、虹梁が新たに作られており修理の場合も全面解体を伴う規模であり、この本殿の建築年代としては、天保14年(1843)とするのが妥当と考えられる。

#### 5. 有形文化財建造物としての価値

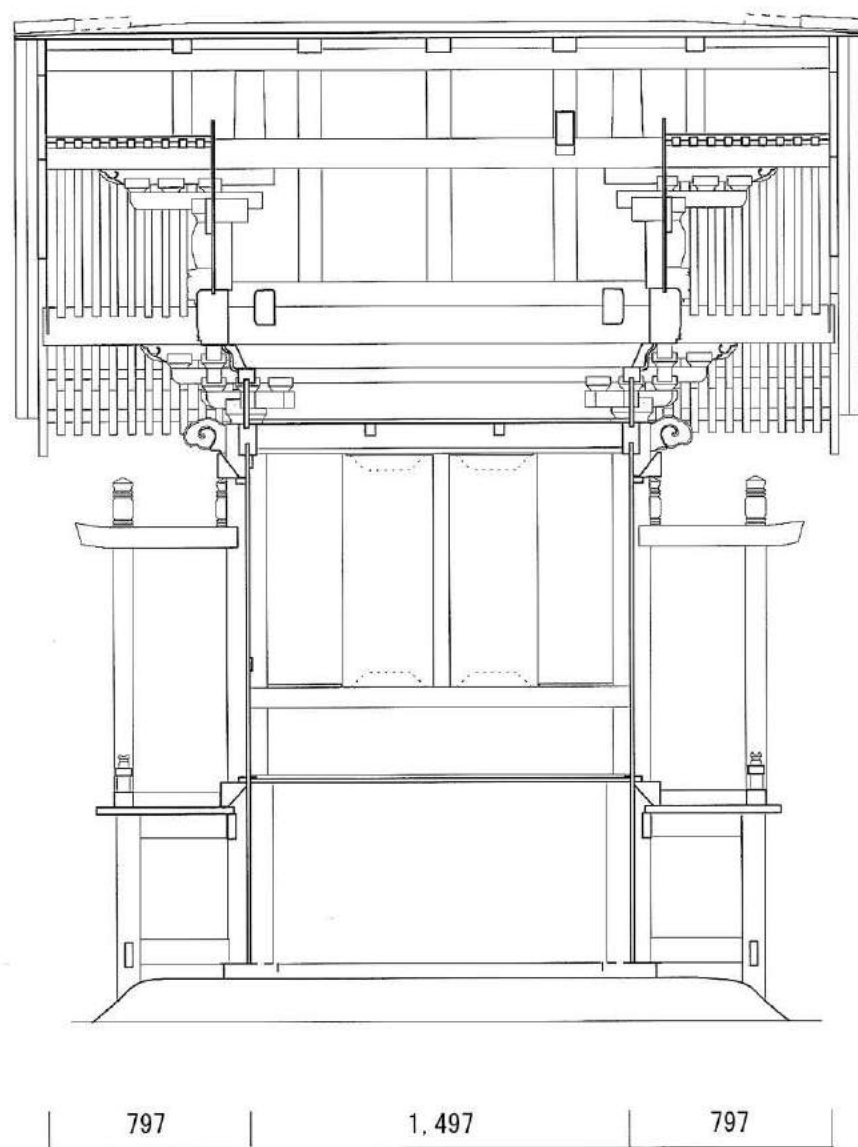
平山天満宮本殿は、虹梁裏面墨書から天保14年(1843)の建築であると推定でき年代指標となる作例として貴重なこと、小屋裏の簡明な構造がその規模を考慮すると極めて獨創性に富むこと、18世紀末以前に宗像地域の特色をなした、覆屋を必須とする板葺神社本殿の様相をよく保っていることにおいて、宗像市の有形文化財建造物として高い価値を有すると考えられる。しかし維持に貢献してきた地元世帯数の大幅な減少は、この貴重な建造物を次世代に伝える上で深刻な障害になると憂慮され、保護に向けたしかるべき対策が早急に望まれるところである。



第8図 本殿・覆屋平面図 (S=1:30)

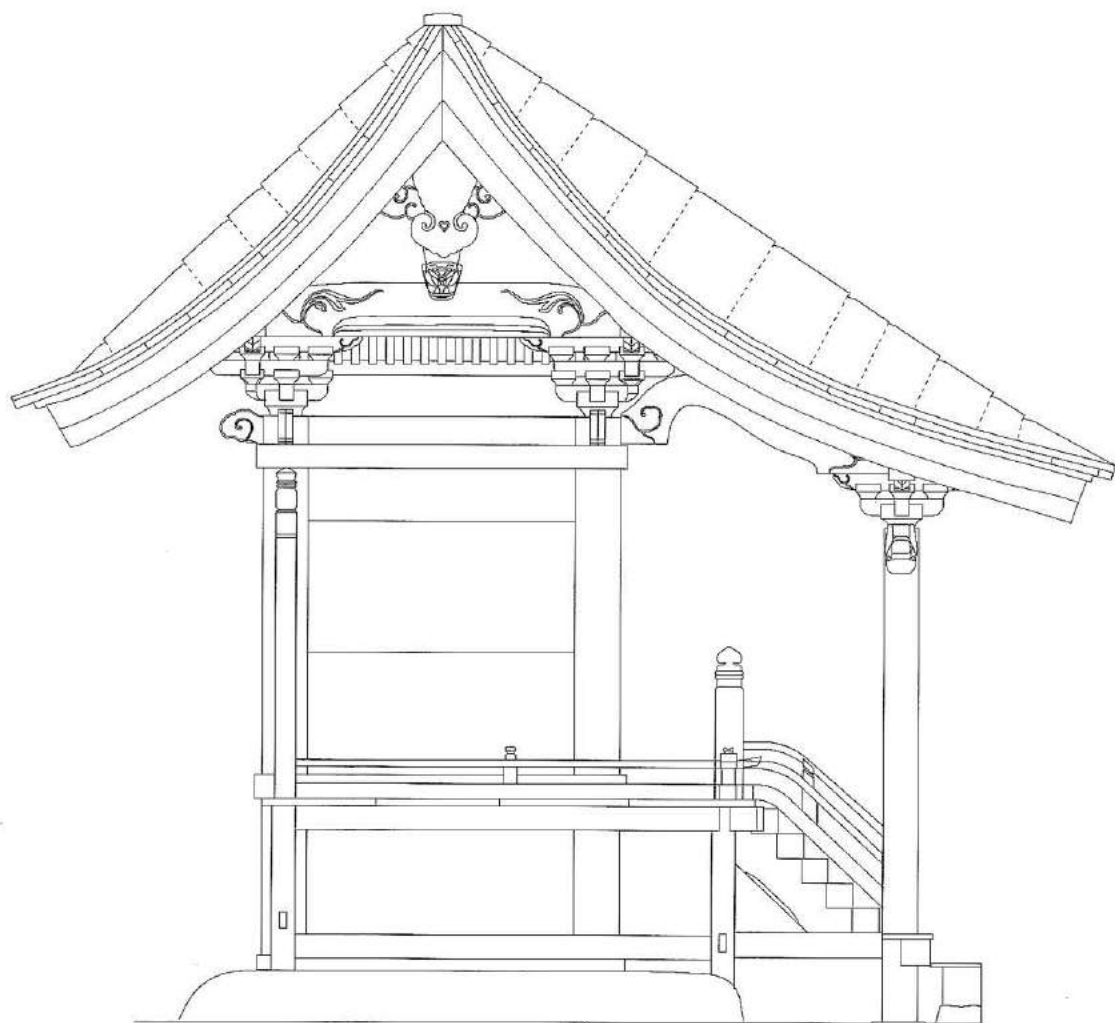


第9図 本殿桁行立面図 (S=1:30)

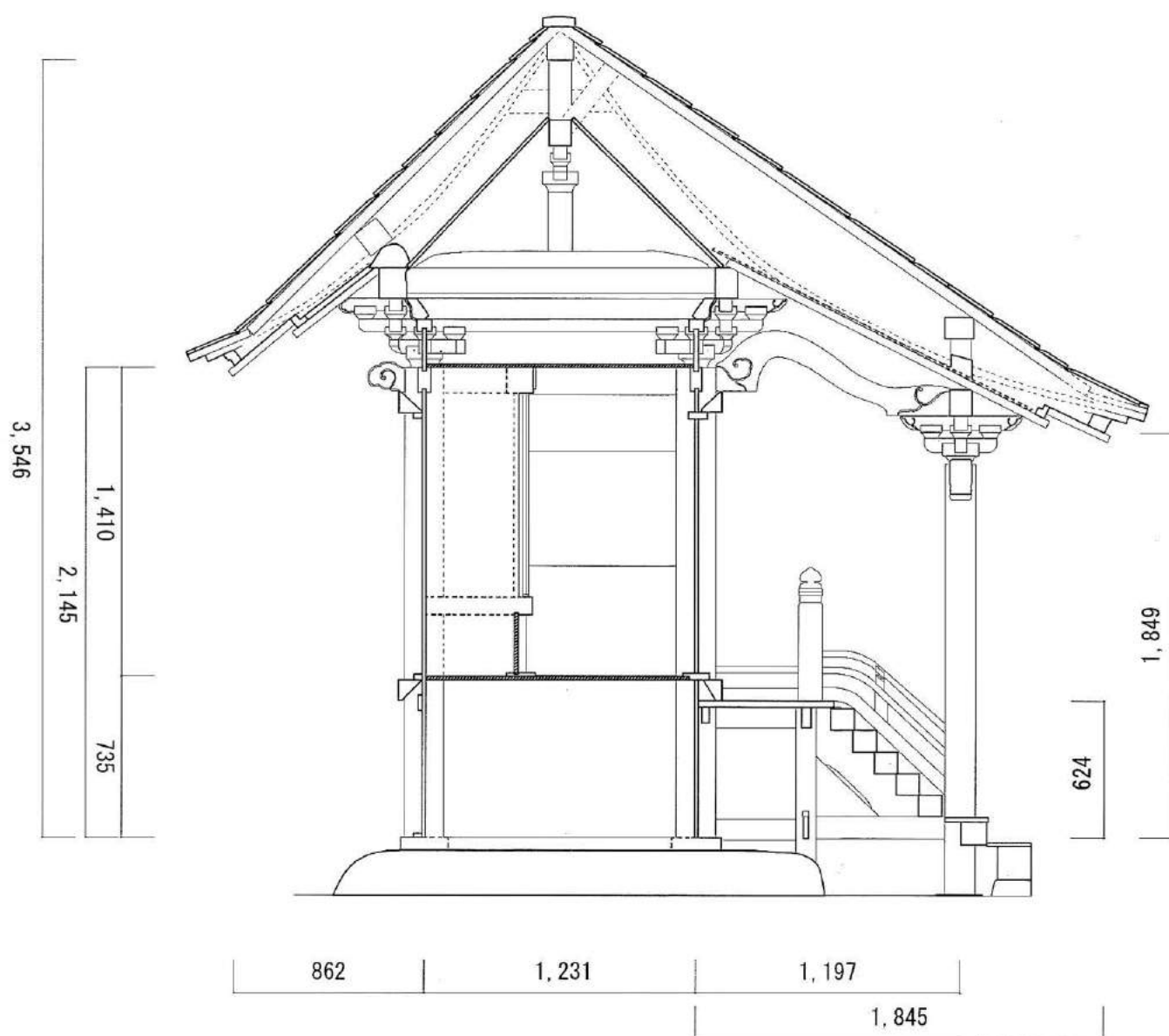


第10図 本殿桁行断面図 (S=1:30)

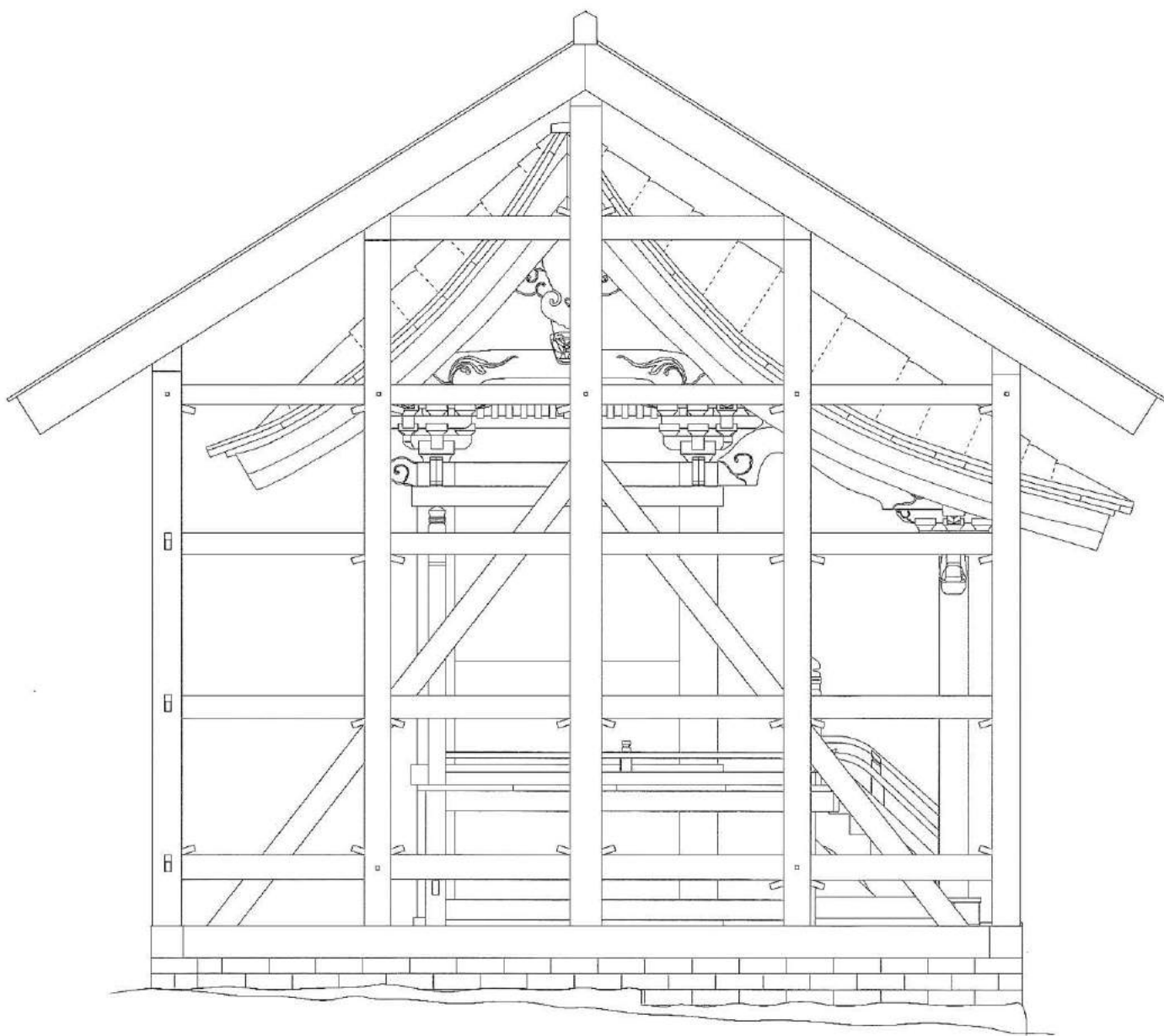




第11図 本殿梁間立面図 (S=1:30)



第12図 本殿梁間断面図 (S=1:30)



第13図 本殿・覆屋梁間立面図 (S=1:30)

表 1 神社の規模と屋根葺き材

所在地	小字名	種別	神社名	建物名称	規模	屋根葺き材
村山田村	岩野	氏神	的原大明神	神殿	三間社	板葺き
				拝殿	貳間三間	葦葺き
	本村	小社	天満宮 天満宮	神殿	壹間社	板葺き
				拝殿	壹間社	板葺き
	枝村	小社	八大龍王	小祠在り	貳間	葦葺き
大井村	本村中	氏神	和歌大明神	神殿	壹間半	小板葺き
				拝殿	貳間三間	瓦葺
	大へら	小社	国玉社	末社祇園社	三尺四方	瓦葺
					壹間半四方	
	出丸	小社			壹間半貳間	
	ほたる免	小社	身隠社	石の小祠		
	不勤ノ妻	小社	八大龍王社	小祠		
	枝郷沢加院中	氏神	釈迦尾神社	神殿	壹間社	小板葺き
田原村	中尾	氏神	示現宮	神殿	壹間社	小板葺き
				拝殿	貳間三間	葦葺き
					三尺社	瓦葺
		小社	貴布祢	拝殿	壹間四方	
					三間社	瓦葺
					壹間四方	
	平井		的原本大明神	神殿	壹間社	
				拝殿	貳間三間	葦葺き
					三尺社	瓦葺
		小社	稲荷社	拝殿	壹間四方	
					三尺社	瓦葺
					壹間四方	
		小社	天満宮社	拝殿	三尺社	瓦葺
					壹間半	葦葺き
					壹間四面	葦葺き
	古宮	小社	福地社	拝殿	壹間四面	葦葺き
					三尺社	瓦葺
					三尺社	
東江村	堀	小社	貴布祢	同	三尺社	
				拝殿	壹間四方	
	香ノ原	小社	八大龍王		三尺五寸三尺	
				拝殿	貳間三間	葦葺き
	辻ノ浦	小社	弁天社		壹間半	葦葺き
	井ノ久保	氏神	矢房宮	神殿	壹間社	小板葺き
				拝殿	貳間半三間	瓦葺き
	おき	小社	伊久志社		壹間壹間半	
久原村	おふき	小社	貴布祢		壹間七尺	
	浦町	小社	貴布祢		壹間七尺	
	同所	小社	貴布祢		壹間七尺	
	宮ノ脇	小社	天満宮		壹間半四方	
	松尾	小社	祇園社		壹間八尺	
	榎木		摩利支天	神殿	三尺四方	瓦葺き
				拝殿	壹間半貳間	瓦葺き
	いはノ元	氏神	六之御前社	神殿	四尺四方	板葺き
				拝殿	壹間半貳間	葦葺き
王丸村			貴布祢	小祠		
	枝郷川崎	氏神	川崎大明神	神殿	四尺四方	板葺き
				拝殿	壹間半貳間	葦葺き
	平清水		貴布祢社		三間五寸四方	板葺き
					長貳間横壹間半	葦葺き
	峠		天満宮 福地神社	拝殿	三尺四方	板葺き
				小祠三ツ	壹間半貳間	葦葺き
大穂町	金魚山	氏神	熊野宮	神殿	四尺四方	板葺き
				拝殿	壹間半貳間	葦葺き
	同所山上		王子社	社	九間四方	
	許斐谷		印鑑社	小祠		
	許斐谷口		貴布祢	小祠		
	本村	氏神	若宮八幡宮	神殿	壹間四方	小板葺き
				常殿	壹間半壹間	瓦葺
			妙現社	拝殿	貳間三間	瓦葺
大穂村	別所	氏神	心吉神社	社	壹間四方ノ内二小祠有リ	
					貳間三間ノ内小祠三有リ	
	枝郷許斐	氏神	六之御前社	神殿	壹間四方	小板葺き
				拝殿	三間三間	葦葺き
大穂町		氏神	貴布祢社祇園社			
				若宮小祠社内二有リ		
大穂村	松か平	氏神	貴布祢神社	神殿	三尺四方	
				拝殿	壹間半貳間	葦葺き
	森添	小社	皇子社		貳尺四方	瓦葺
					貳尺四方	
大穂村	不焼寺	小社	近津社	神殿	壹間四方	
	中屋敷	小社	熊野社	拝殿	貳間三間	葦葺き
大穂村		氏神	宝満社		貳尺五寸四方	
					貳尺四方	

典拠：「宗像郡明細帳」（『宗像市史』史料編第三巻近世，文書史料 156：「福岡県史資料編纂資料 195」福岡県立図書館蔵）

図版 1





妻飾り 本殿北妻



海老虹梁絵様 本殿北妻



縁周り本殿北側



虹梁絵様 本殿北妻



象鼻本殿向拝



大瓶束 本殿北妻

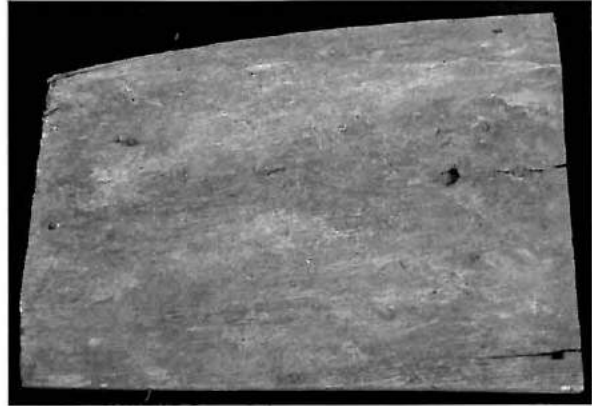


本殿向拝墓股





身舎内部本殿



板瓦



小屋裏本殿構造



板葺簀甲頂部



小屋裏本殿天井



本殿北妻藝股



覆屋越し俯瞰本殿北面

平山天満宮

—福岡県宗像市吉留所在平山天満宮本殿の調査報告—

宗像市文化財調査報告書 第73集

平成27年3月31日

発行 宗像市教育委員会  
宗像市東郷1丁目1番1号

印刷 大成印刷株式会社  
福岡市博多区東那珂3丁目6番62号